

学生記者がゆく! / 同じ時代を生きる徳島の人たちが、どんなことにチャレンジしているのか。今、徳島に起こっている動きや話題の人、注目の場所を高校生&大学生が取材。自分の目で見て感じたこと、再発見した徳島の魅力をリアルにレポート!

# とくしま魅力発見! 若者レポート

[主催]徳島県政策創造部地方創生局とくしまぐらし応援課 徳島県徳島市万代町1-1 / 088-621-2089

go to  
海陽町編

画期的な方法で牡蠣を養殖する  
水産ベンチャー



株式会社ReBlue  
取締役 高畑拓弥さん

「海陽町の海は綺麗すぎるため牡蠣の餌となるプランクトンが少なく、従来の養殖方法はうまくいかない」。そんな考えを新たな手法を採用することで覆したリブル。環境負荷を軽減し、持続可能な社会の実現に向けて「海の豊かさを守る」取り組みを続けている。種苗生産や販売も手掛け、同業者への技術提供も積極的に行う。高畑さんは地方創生をテーマに、海部高校魅力化やデュアルスクールなど多角的な事業を展開している。

●リブルは、牡蠣は育たないといわれていた美しい海陽の海で牡蠣を養殖することに成功した。しかし、一番の目的は美味しい牡蠣を作り、た

くさん売ることではないという。日本の水産業をもう一度盛り上げることが目的だ。リブルは「世界一おもしろい水産業」を目指して徳島県海陽町から漁業の魅力化を図っている。彼らの目指す漁業は「共存」であるように思う。養殖漁業と獲る漁業との共存、広島や三重などの他の牡蠣養殖場との共存、また、自然との共存である。特に、他の牡蠣養殖場と競争するのではなく、お互いに良い関係を築いて協力していくという考え方は新鮮である。具体的には、リブルは種牡蠣を作る技術があるのでそれを他の牡蠣養殖場に販売したり、どこかの養殖場が台風などの被害に遭うと、他の養殖場が助けるなどである。海陽町の海でリブルが

起こした革命のように、水産業にはまだまだ可能性が秘められている。水産業からなにかが変わる。未来の日本のために尽力する人たちが輝いて見えた。(城ノ内高1年・山下)

●第一次産業は比較的物価の安い発展途上国で盛んに行われ、先進国はそれを輸入して財を手に入れる。そのようなイメージを持っている人は、私を含め多く存在すると思う。実際そのイメージは間違っていないし、先進国で農業や漁業など第一次産業を行うために必要なコストは、発展途上国よりも大きい。だが、今回私が取材した高畑氏は、そのような認識を持ち続けることは危険であると警鐘を鳴らしている。なぜなら、今は生産コストの小さい発展途上国もいずれは発展し、生産コストは上がっていくからだ。衰退していく日本の水産業を放置しておけないと考えた高畑氏は、一から勉強して牡蠣の養殖に挑戦した。未来を視野に入れた高畑氏の挑戦的な取り

組みは、初めは困難にぶつかることも多いが、いずれ日本の人々の役に立ち、評価されていくと思う。(徳島大3年・山口)

●リブルでは、海陽町と同じく海が綺麗なオーストラリアで盛んに用いられているシングルシード生産方式を採用しています。海に設置したボールの間をワイヤーでつなぎ、そこにバスケットを取り付け、牡蠣を入れて養殖生産します。従来の方法と違って海にマイクロプラスチックを流さずにすむため、環境保護の観点から見ても非常に優れています。(阿波高1年・近藤)

●「ノルウェーでは漁師が一番人気の仕事」って知っていますか? 高畑さんは、日本でも水産業を盛り上げ



高畑拓弥さん(左端)

1989年生まれ、神奈川県横浜市出身。慶應大学SFC卒。ベンチャー、ソーシャルビジネスの経験、商社のコーポレートマネジメントスキルを武器に、地方創生の最前線で奮闘中。現在は一般社団法人Disport 代表理事、株式会社リブル 取締役、一般社団法人ミライの学校 代表理事を務める。

るために、牡蠣養殖に従来式と比較すると収益性・環境保全・労働環境すべての面で優れた新しい方式を取り入れました。海陽町から国内の他の地域にも広めていくため、現在は教育現場へのアプローチも始めています。持続可能な社会に向け、地方創生の最前線で働いています。(徳島大1年・塚田)

## 線路と道路を走る! 世界初の乗り物

### DMV(デュアル・モード・ビークル)

昨年12月25日にデビューしたDMV。列車と車の機能を兼ね備え、線路と道路の両方を走ることができる。鉄道モードにチェンジすると後ろのゴムタイヤが駆動して線路を走行。乗り換えなしでバスと鉄道の両方が利用できるのが魅力。



列車からバスにモードチェンジする瞬間。鉄車輪が15秒ほどで格納されていく。

●乗る前にDMVの下の部分を覗いてみると車輪とタイヤの両方がついていました。どんな感じでタイヤから車輪に変わるのかなどワクワク。モードチェンジのときに流れる音楽が阿波踊りで徳島感ありました。線路を走っているときに見えた海の景色がとても綺麗で感動しました。(生光高1年・村上)

●車内には地元の小学生が描いたDMVの絵が飾られており、地域



の人々が一体となって盛り上げる一大産業なのだ心が温かくなりました。バスと鉄道のどちらのモードもあり揺れは激しくなく、快適な乗り心地でした。(阿波高1年・近藤)

●鮮やかに彩られたDMVが走っているだけで、街がとても華やか。特に、バスモード、鉄道モードに切り替わる瞬間はカッコ良かった!(徳島大3年・平田)

●線路と道路を走る二刀流の乗り物。見た目はとても可愛いフォルムをしているが、線路の上を走る姿はとても凛々しい。今後DMVは、車や自転車のような身近な乗り物として私たちの生活の中で活躍するだろう。(生光高1年・浅田)

## 熱帯魚やサンゴの群生にうっとり

### 海中観光船 ブルーマリン号

海陽町の沖合に浮かぶ小さな島、竹ヶ島。室戸・阿南海岸国定公園を約40分クルージングする「ブルーマリン号」では、船底の展望室から海中の幻想的な景色が楽しめる。



●探検家のような気持ちで船底の展望室へ降りると、そこには青い空間が広がっていた。夏は魚がたくさん、冬は水が澄んでいてサンゴや熱帯魚を観察しやすい。自然の姿がめいっぱい楽しめ、まるで動く水族館のよう。(徳島大1年・塚田)

●窓から見える光景はとても美し



いものだった。海ならではの深みのある青を背景に、数えきれないほどの魚が泳いでいる。種類も多種多様だ。特に印象に残った魚の一つが、青い海の中でひととき青く見えたソラスズメダイである。(徳島大3年・山口)

●ソラスズメダイが多く、小魚の超大群やハリセンボンなども見ることができた。たまにナマコの姿も。陸から見ただけでは分からない海の中の様子が手に取るようにわかる。サンゴ場や砂地など、海底の地形がとても豊か。県南の豊かな海に触れることができた。(城ノ内高1年・山下)

## Student reporter



### 海陽町を取材した学生記者

山口武人(徳島大3年) / 大学では環境倫理学を専攻。趣味はサッカー。

平田開都(徳島大3年) / 徳島の魅力を全国にもっと知ってもらいたいです。

塚田さら(徳島大1年) / 大阪府出身。美味しい食べ物、自然あふれる海と山、徳島のいいところを楽しんでいます!

山下真由(城ノ内高1年) / 魚と河川が好きです。近藤弥生(阿波高1年) / これからも徳島のいいところをたくさん見つけていきたいです。

浅田萌(生光高1年) / 長所は社交的など、特技は楽器。好きな食べ物はりんごです。

村上陽香(生光高1年) / 私の強みは英語です。小学5年生で準二級を取得することができました。

## go to 神山町編



ピンチをチャンスに、神山のまちづくりをリード

## 特定非営利活動法人グリーンバレー 事務局長 竹内和啓さん

グリーンバレー設立時に理事長を務めた大南信也さんの誘いで2016年に参画。現在は主に、指定管理事業やサテライトオフィスの誘致、視察の受け入れなどを行う。「大南さんたちが20年、30年やってきたことを、未来に繋いでいくのが自分の役目だと思っています」。

「日本の田舎をステキに変える!」をミッションに掲げる認定NPO法人。神山町をより素敵にするために、町内で活動する人のサポートを行っている。人口減少を受け入れ、若者やクリエイティブな人材を集める「創造的過疎」を意識して、ワーク・イン・レジデンスやアーティスト・イン・レジデンス、サテライトオフィスの支援などを実施。まちの将来に必要と考えられる働き手や起業家を誘致した。「田舎に

は、人口減少や働き先の不足など、地域課題と呼ばれるピンチがたくさんある。このピンチをチャンスと考えて、ピンチを止めることができるような行動を起こすことで、田舎だからこそ注目され、応援してもらえる」という竹内さんの言葉が印象的だった。都会でないとチャレンジできないと感じていたが、徳島だからこそできるチャンスを掴み、挑戦していきたいと感じた。(徳島大1年・増本)



築約90年の古民家を改修したサテライトオフィス「えんがわオフィス」。



竹内和啓さん

阿波町出身、神戸大学大学院修了。多国籍企業P&GでSEとして勤務後、ネット通販ビジネスを起業。4人の子育てを通じて探究型教育に可能性を感じ、コーチ・コンサルタントとして独立する。2016年より現職。グリーンバレーの全事業を統括。

世界を変える起業家精神を育む5年間

## 神山まるごと高専(仮称・認可申請中) 理事兼事務局長候補 松坂孝紀さん

昨年10月から神山町に移住し、開校準備に邁進。「新入生には、広い意味での“ものづくり”が好きであってほしい。そして何より、自分の意志で、自分の責任で入学してほしい。大人になることは、そこからスタートすると思います」。

2023年に開校予定の神山まるごと高専。「モノをつくる力で、コトを起こす人」となるために必要なスキルを身につけることができる。授業では、一つの科目にテクノロジー、デザイン、起業家精神の3つの要素が取り入れられており、さまざまな角度から物事を見る力が身

につくと感じた。さらに、人の形成には学校の授業だけでなく、授業外の経験や思い出が大切であるという考えから、学生寮を設けている。そこでは生徒自身でルールを作ることができ、「ここは小さな社会、あなたは大人」という言葉とともに、社会について生徒が自然と学ぶことができる。中高生の世代から社会について学べ、必要なスキルを身につけられることはとても大切であり、私も体験してみたかったと思う。(徳島大1年・増本)



給食は「かま屋」が手掛ける予定。



松坂孝紀さん

東京大学教育学部を卒業後、人材教育企業アチーブメント株式会社でマーケティング、人事、経営企画などを担当。2017年に子会社の取締役役に就任し、組織変革コンサルタントとして企業や地方自治体の人づくり・組織づくりプロジェクトに従事する。2021年、神山まるごと高専(仮称)に参画。

## go to 上勝町編



2度の挑戦と成功、その共通点を探る

## 合同会社パンゲア CEO 野々山聡さん

「月ヶ谷温泉村キャンプ場 パンゲアフィールド」の施設管理や、県内外からの視察や研修の受入、子どもを対象とした自然体験ツアーの企画運営などを行う合同会社パンゲア。CEOの野々山さんに、上勝町の軌跡を尋ねた。

上勝町は、人口約1500人の小さな町だ。そのため、地域住民はみな顔見知りで親交が深い。今回は、その小さな町で取り組まれている葉っぱビジネスとゼロ・ウェイスト宣言について紹介する。Sustainable development(持続可能な発展)を目指したこれらの取り組み。一見全く別のものに見えるかもしれないが、成功した理由にはある一つの共通点があった。

葉っぱビジネスを始めたのは、当時上勝町農協の職員だった横石知二氏だ。寿司店で紅葉の飾りつけを見て、葉っぱビジネスを思いついた。日本料理に使われるつまものは料理人自ら探していくことが当たり前だった当時、つまもの用の葉を栽培し、販売するというアイデアは、町民にとって理解しがたいものだった。しかし、横石氏の熱心な訴えによって動かされた町民は、昭和61

年に「いろいろ」事業をスタートさせた。

横石氏は、この事業を心理戦によって成功させる。生産者自らパソコンやタブレットで農協からの注文を確保するシステムや、売上額のランキング発表で、生産者同士の競争心を生み出した。また、住民たちが顔見知りであるからこそ、負けたくないという競争心が生まれやすかった。その結果、いろいろビジネスは成功した。

しかし、この時点で脚光を浴びていたのは、あくまでいろいろビジネスに携わる一部の住民のみ。そんな中でなされた「ゼロ・ウェイスト宣言」では、すべての住民がまちの変化の立役者となった。ゴミを捨てるのではなく、45分別リサイクルするというこの取り組みは、良いことだと分かっているにもかかわらず実際に行動すると大変なことだ。「少くくらいっ



上勝町ゼロ・ウェイストセンターのごみステーション。



でもバれない」と思ってしまうのではないかと考えるが、住民が顔見知りだとそのようなことはしにくくなる。また、いろいろでの成功体験を得たからこそ、珍しい取り組みに挑戦することへのハードルが低かった。

これらの取り組みは、上勝町の親密な人間関係とそれによって生まれた団結力や競争心が共通の強みとして成功を収めたといえる。いろいろビジネスとゼロ・ウェイスト宣言については、以前から耳にしたことがあったが、今回の取材でその裏側を見ることができ、地方の小さな町でも大きな成功ができる可能性があることに感銘を受けた。また、何か新しいことを始める時、多くの人はないものを作り出すことに意識を持ちがちだが、目の前にある当たり前のものに注目して価値を見出すということの大切さを知った。今後、映像制作など、ものづくりをしていく上でこの視点を活かしていきたい。(徳島大1年・松林)

野々山聡さん

愛知県生まれ。高校時代にマーシャルフライトスペースセンター(NASA)のスペースキャンプに参加し、宇宙飛行士を目指してアメリカに留学する。帰国後、株式会社インテリジェンスにてHR事業に従事。内閣府インターナショナル、地域おこし協力隊を経て2016年に合同会社パンゲアを設立。



## Student reporter



神山町、上勝町取材した学生記者

(左) 松林永和(徳島大1年) / 沖縄県出身。好きな食べ物は焼肉! 大学進学後YouTubeにハマリ、動画制作を始める。主にPV制作をしている。将来は、映像のみならず幅広い分野のクリエイターとして活動し、書籍を出したい。  
(右) 増本咲枝(徳島大1年) / 徳島県出身で、いろんな人とお話ししたり関わったりすることが好きです。将来は徳島の活性化に取り組みたいと考えていて、地域創生などの分野に興味があります。趣味は音楽を聴くこと、ギター、ダンスです。



当日の様子や各スポットの紹介を動画でチェック!

徳島県「とくしま若者人材・ふるさと魅力体験発信事業」